

平成 30 年 5 月 30 日現在

機関番号：34429

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03900

研究課題名(和文)被災した心の復興、そして惨事の記憶の継承に関する宗教社会学的研究

研究課題名(英文) Sociological Study on the Reconstruction of Damaged Hearts and the Succession of Memories of Tragedy

研究代表者

三木 英 (MIKI, Hizuru)

大阪国際大学・私立大学の部局等・教授

研究者番号：60199974

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：大震災の記憶はどうすれば次代に引き継いでゆけるのか。これをテーマとして日本各地の「旧」被災地や海外の被災地で調査を行ったのが、本研究であった。調査では、国内の被災地で毎年催される慰霊行事が、人々がかつての惨事を想起させていることを確認した。また記憶を伝えることを目的としたアートプロジェクトに、犠牲者との交流という宗教的モチーフが組み込まれていることを見出した。すなわち震災記憶の継承に宗教の果たす役割の大きいことを、本研究は明らかにしたのである。なお慰霊行動による記憶の継承は、他国の被災地で同等に見られるわけではない。それが多分に日本的な現象であることも見出したのも、本研究の成果といえる。

研究成果の概要(英文)：How can we inherit the memories of great earthquake? The aim of this study was to find out the answer to this problem. We, the research team, have conducted sociological research in ever disaster stricken areas and confirmed that the memorial services annually let people remember the sorrowful memories. Moreover, we found out the fact that in some artistic projects whose aim is to inherit the tragic memories to the future, there is connoted a religious motif, interchanging between the dead and the living. That is to say, religion plays a significant role in inheriting memories of the past earthquakes. Additionally, we have come to notice that such activities as inheriting memories by means of religious rituals is seldom observed in other countries than Japan. This is also an outcome of this study.

研究分野：宗教社会学

キーワード：記憶の継承 慰霊 宗教集団 アートプロジェクト 地域共同体 国際比較

1. 研究開始当初の背景

本報告が書かれているのは、東日本大震災から7年を経過した2018年である。阪神・淡路大震災の発生年を起点にすれば、23年の歳月が流れている。

この二つの大震災が日本社会に及ぼしたインパクトの甚大であることは、論を俟たない。7年を経ても、23年が経過していようと、経済的・身体的・精神的なダメージに苦悶する人々は絶えていない。ひとたび大地震が発生すれば人と社会は傷つく。時を経て傷は傷跡と化しても、それは長きに亘って消えず疼き続ける。人と社会の苦悩が止まない限り、震災に終わりはないのかもしれない。

では疼かなくなり、苦悩が止んだなら、大震災は終わったと認識してよいだろうか。そして大震災という出来事を、忘れてよいだろうか。

忘れてよいとの声は、果たして何処かから聞こえてくるだろうか。震災の記憶を風化させてはならないとの声ばかりが、聞こえてくるのではないか。

ではいつまで、私たちは震災を記憶し、語り続けてゆけばよいのだろうか。人々に苦難を強いた二つの大震災は、過去に発生した出来事である。いつまでも過去に縛られることがあってよいのか。

ここで、考えるべき問題が現われてくる。震災の記憶はそもそも、受け継いでゆくべきものなのだろうか。受け継がれてゆくべきものならば、それは何のために、なのだろう。また、いつまで受け継いでゆくべきなのだろう。永遠の継承は、果たして可能なことなのだろうか。人の心の移ろいやすさを思えば、それが簡単なことでないことは自明である。どうすれば、永続的継承は可能となるのだろうか。

2. 研究の目的

本研究を着想したのは、主として、上記問題を考えるためであった。考えるために、諸方のかつての被災地を訪ね、震災記憶がどう伝えられているかを調査したのである。

日本は古来より、多くの地震に襲われてきた地震国である。明治以降の一世紀半に限定しても、実に多くの地震が発生している。そのなかでも1000人以上の犠牲者を記録した地震のケースをいくつか、本研究は取り上げている。それほどに被害甚大であれば、まして近代以降に発生しているものならば、その事実は忘却されるはずがなく、次代に継承されていて当然と考えられる。

しかしながら現代の日本人が知る大震災は、関東大震災(1923年)、阪神・淡路大震災(1995年)そして東日本大震災(2011年)が中心であるように思われる。いうまでもなく、これら三つの大震災以外にも、住民に塗炭の苦しみ強いた大地震は発生している。そしてそれらのことを、いま多くの日本人が知ってはいない。では、それら旧被災地でいま暮らす人々は、かつて郷土を震撼させた天災を忘却しているのだろうか。地震の記憶が伝えられているなら、それはいかなる手段によってであるのか。

本研究が目指したのは、旧被災地における現実の確認であり、その現実をもたらしつ

アクターを解明することだったのである。

3．研究の方法

本研究は、全国的に記憶される上記三つの大震災以外の地震の現場を取り上げた。もとより、それら旧被災地が近代以降の日本の被災地のすべてではない。とはいえ、それらは本研究が掲げるテーマを考えるにあたり、適切な題材を提供しているはずである。

調査は、取り上げた「旧」被災地にて可能な限りのデータを蒐集することを中心に遂行された。事前に文献あるいはウェブ上に情報を可能な限り探索し、それに依拠してのデータ蒐集である。関係者を探し出してのインタビューや観察を中心とした質的調査であった。

また国内の旧被災地にとどまらず、海外にもフィールドを求めている。インド洋大津波（2004）の被災地であるインドネシアのバンダ・アチェ、同じくタイのプーケットとカオラック、中国四川省の汶川地震（2008）被災地、そしてニュージーランド・カンタベリー地震（2011）の被災地がそれである。日本からみれば異文化世界であるこれら旧被災地において地震・津波の記憶がどう伝えられているか、それを把握し、日本における事例に並べて比較するためである。

4．研究成果

本研究で調査されたのは主に、濃尾地震（1891）・京丹後地震（1927）・鳥取地震（1943）・三河地震（1945）・福井地震（1948）・中越地震（2004）・東日本大震災（2011）の被災地である。それらフィールドで見出されたのは、年に一度、その天災の発生した日に（多くの生命が失われたその日に）かつての惨事を人々に思い出させる行事が継続的に催されているという現実であった。そしてその行事とは、慰霊祭である。

慰霊祭の執行は、いうまでもなく犠牲者の霊を慰めたいという動機に発する。道半ばで生命を奪われた大切な人々にせめて彼岸で幸せに「生きて」欲しいという願い、そして残された人々は犠牲者の無念を忘れてはならない、という心情が慰霊祭に人々を集わせる。

慰霊祭だけが旧被災地で震災記憶をつなぎ続けている、とここで強弁しようというのではない。社会において記憶をつなぐ有力な社会的装置として機能する一つが、慰霊祭であるというのである。このことを敷衍し、宗教（的な装置である慰霊祭）が記憶継承に大きな役割を果たしている、と本研究は主張しよう。

慰霊祭に関わる人々の心底には、残された者に抱かれた罪意識 *survivors' guilt* があると考えられる。大切な人が世を去ったのに自分（だけ）は生き残っているという意識、さらに自分が身代わりになればよかった（しかしなれなかった）という意識、自分が「あのとき」違う言葉を発していれば、また違う行動をしていればあの人は助かったかもしれない、という悔いから生じる罪意識がサバイバーたちを追い込む。その念が、彼らをして、犠牲者への思いを表現する宗教的儀礼の実践に向かわしめるのである。慰霊祭はこうした意識によって駆動される。

そしてこの意識は、人災のサバイバーたちの中で顕著である。本研究は第二次世界大戦末期に空襲（長岡空襲、福井空襲）に曝された地域において、また多大な死傷者を出した列車事故（信楽高原鉄道列車事故）現場でも調査を遂行し、そこからこの結論を得た。人災が人間の犯した過失ゆえに生起するものである限り、人的努力でそれを食い止めることはできたはずである。それができなかったという現実が、サバイバーたちに罪意識を喚起し、彼らを慰霊祭に出席させ、犠牲者に向け頭を深く垂れさせる（そして惨事の記憶を受け継いでゆくことを誓わせる）。

天災においても、サバイバーたちに罪意識が生まれている。天災だから仕方なかったのだとする発想は 後述する海外の被災地における事情に比較すると 日本において生じ難いと推察できるのである。諦念は生じず、悔いばかりが残存する。そして自分たちを責める思いは消えず、慰霊祭は執り行われ続ける。その結果、震災記憶が時を超えて継承されてゆく。

震災記憶の継承と慰霊行動は密接に関連する。そしてこの関係は、日本において顕著である。海外の被災地において、この関係は（皆無ではないが）観察され難いのである。インド洋大津波により激甚な被害を受けたインドネシアのバンダ・アチエは、イスラーム信仰の篤いことで知られる土地であるが、そこに犠牲者慰霊への志向は乏しい。また仏教国・タイの大津波被災地でも、慰霊碑の類は稀有である。一方、カンタベリー地震被災地のクライストチャーチでは犠牲者たちの名を刻んだ「メモリアルウォール」が建築され、そこに犠牲者を偲ぶというモチーフが認識できた。とはいえ、地震発生の日に現地で開催される種々の催しに籠められたメッセージは犠牲者を、でなく地震という事実を忘れてはならないということが勝り、犠牲者に寄せる思いは日本ほどに熱くない。また中国の被災地で語り継がれるべきとされるのは犠牲者たちのことではなく、救援に奔走した人民や政府の偉大さであることも、ここに付言しておきたい。

震災による犠牲者を慰霊することは、日本の文化風土に生きる我々には極めて当然のことである。しかしグローバルな視点に立てば、それは多分に日本特有であるといえる。そしてこの特有な現象が、この国で震災記憶をつなぎ続ける役割を担う。

東日本大震災被災地でも、各地で毎年の「あの日」に慰霊祭は営まれている。これから未永く、儀礼執行とともに震災記憶が再生されてゆくのであろうが、これに加えて本研究で着目したのは、東日本大震災の記憶を伝えることを目的に開催されるアート・プロジェクトの存在であった。プロジェクトには宗教的なニュアンスが含まれていたのである。すなわち生きている人々と犠牲者（死者）との交流が、そこにテーマ設定されているのである。プロジェクトは明らかに、宗教的世界観を背景にしている。この事実もまた、宗教が役割を担っていることの力強い証左となろう。

近年、とりわけ東日本大震災以降、日本において宗教のプレゼンスが高まってきているように感じられる。それは避難所として宗教施設が機能するという事実、また宗教を媒介に形成された人間関係が被災した場合の救援・支援に有効であるという事実が、広く知

られるようになったからである。そして本研究は、上記の宗教のポテンシャルに加え、記憶継承においても重要な役割を宗教が有することを明らかにして見せた。本研究により、日本における宗教のプレゼンスが一層に高まるであろうことが、予想されるのである。

5. 主な発表論文等

三木英・渡邊太・川田進・岡尾将秀『傷ついた心の復興、そして惨事の記憶の継承に関する宗教社会学的研究』(課題番号 15K03900) 科学研究費補助金 基盤研究(C)、研究成果報告書、2018年3月<全106頁>

* 上記報告書は改稿の上、明石書店から刊行する予定である。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三木 英 (MIKI, Hizuru) 大阪国際大学・グローバルビジネス学部・教授 研究者番号：60199974

(2) 研究分担者

渡邊 太 (WATANABE, Futoshi) 大阪国際大学・人間科学部・講師 研究者番号：80513142

(3) 研究協力者

川田 進 (KAWATA, Susumu) 大阪工業大学・教授

岡尾将秀 (OKAO, Masahide) 大阪市立大学・都市文化研究センター・研究員